

令和3年度の病害虫発生に関する情報

徳島県

(徳島県立農林水産総合技術支援センター経営推進課 田村収)

1. 新病害虫の発生

(1) サツマイモ基腐病 (令和4年1月11日特殊報)

令和3年11月、県内サツマイモほ場から、塊根の茎に近い「なり首」部分から塊根内部にかけて暗褐色に変色した株が確認された。採集した塊根を農林水産省神戸植物防疫所に同定を依頼したところ、サツマイモ基腐病と判明した。本病は、沖縄県、鹿児島県等、23都道県で報告されている。本県での被害確認は初めてである。

2. 水稻

(1) いもち病

早期作における葉いもちの発生は、梅雨入りが5月12日と、平年(6月5日)に比べて21日早かったものの、6月中旬まで降水量が少なかったことも影響し、平年より遅い6月6半旬より確認された。その後、7月上旬に曇雨天が続いたため、7月3半旬には発生圃場率が82.4%と、平年(36.8%)に比べて高く、発病度も4.4と平年(3.0)に比べてやや高くなり、一部圃場では急性型病斑も確認されたため、令和3年7月19日付けで穂いもち注意報を発令した。穂いもちの発生は、7月6半旬より認め、8月3半旬まで発生圃場率が29.4~44.4%と、平年(15.8~23.6%)に比べて高く、発病穂率も0.2~0.6%と、平年(0.1~0.2%)に比べてやや高かった。

普通期作における葉いもちの発生は、早期作と同様に平年より遅い6月6半旬より認め、7月6半旬まで発生圃場率が4.2~54.2%、発病度が0.0~4.3と、平年(5.8~55.4%、0.2~5.6)並であった。穂いもちは、平年よりやや遅い8月6半旬より発生を認め、発生圃場率が30.4%、発病穂率が0.4%と、平年(21.5%、0.2%)に比べてやや高く、また8月下旬以降、晴れの日が少なくと予想されたため、県西部を対象に令和3年8月31日付けで技術情報を発表した。その後、9月3半旬には、発生圃場率が80.0%、発病穂率が0.7%と、平年(39.5%、0.5%)に比べて高かった。

(2) 紋枯病

早期作では、平年より遅い7月3半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が5.9%、発病度が0.1~0.3と、平年(27.0~29.0%、1.7)に比べて低かった。

普通期作では、平年並の7月3半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が25.0~50.0%、発病株率が2.5~7.7%と、ほぼ平年(10.5~60.0%、1.8~16.4%)並であった。その後、8月中旬に273.0mmのまとまった降雨及び、8月下旬の平均気温が28.0℃と発病に好適条件が揃ったため、9月3半旬には、発生圃場率が80.0%、発病度が13.4と、平年(66.4%、5.8)に比べて高かった。

(3) 縞葉枯病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(4) 稲こうじ病

県西部の普通期作で、平年並の9月3半旬に発生を認め、発生圃場率が26.7%、発病株率が10.4%と、平年(12.0%、2.5%)に比べて高かった。多発生の要因として、前年本病が発生した地域で、穂ばらみ期に当たる8月中旬の日照不足(日照時間:2.4h)及びまとまった降雨(降水量:273mm)があったことが影響したと考えられた。

(5) セジロウンカ

早期作では、平年よりやや遅い6月6半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が29.4~76.5%、株当たり虫数が0.0~0.4頭と、平年(22.5~49.7%、0.0~0.2頭)に比べてやや高かった。

普通期作では、平年よりやや遅い6月6半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が9.5~54.2%、株当たり虫数が0.0~0.1頭と、平年(14.9~81.7%、0.0~0.4頭)に比べて低かった。

(6) トビイロウンカ

予察灯に5月17日、1頭捕殺され、過去10年間で5月中に本虫が確認された事例がなかったため、5月24日付けで技術情報を発表した。その後も8月6半旬まで断続的に飛来が確認されたが、捕殺数は1~15頭と少なかった。

本田調査において、早期作では巡回調査圃場での発生は認められなかった。

普通期作では、平年より遅い8月6半旬に発生

を認め、発生圃場率が4.2%、株当たり虫数が0.0頭と、平年(20.7%、0.2頭)並であった。その後、発生は認められなかった。

本年度、予察灯へは5月中旬から8月下旬まで断続的に飛来が確認されたが、8月上・中旬の長雨により、本虫の生育に不適な条件であったこと、また普通期作地域では、「トリフルメゾピリム」を含有する箱施用剤が使用されたことが、発生量に影響したと考えられた。

(7) 斑点米カメムシ類

早期作では、6月6半旬から7月3半旬までの水田周辺雑草地における発生地点率が29.4~41.2%、寄生虫数(20回振り)が0.9頭と、平年(57.4~64.2%、6.1~7.1頭)に比べて低かった。その後7月6半旬の本田調査においても、発生圃場率が11.8%、寄生虫数が0.2頭と、平年(34.0%、0.8頭)に比べて低かった。

普通期作では、7月3半旬から7月6半旬までの水田周辺雑草地における発生地点率が70.8~83.3%、寄生虫数が6.1~10.3頭と、平年(69.7~72.6%、6.6~7.8頭)に比べてやや高かった。しかし、その後の本田調査(8月3半旬~9月3半旬)においては、発生圃場率が29.2~53.3%、寄生虫数が0.6~2.5頭と、平年(39.1~43.4%、1.3~1.8頭)並であった。

(8) コブノメイガ

早期作では、平年並の6月6半旬に発生を認め、発生圃場率が17.6%、被害株率が0.7%と、平年(2.0%、0.1%)に比べて高かったが、その後発生が減少し、8月3半旬には発生を認めなかった。

普通期作では、平年より遅い8月6半旬に発生を認め、9月3半旬まで発生圃場率が6.7~8.3%、上位2葉の被害葉率が0.0%と、平年(20.5~24.5%、0.8~1.0%)に比べてやや低かった。

(9) ヒメトビウンカ

早期作では、平年よりやや遅い6月6半旬より発生を認め、7月6半旬まで発生圃場率が47.1~70.6%、株当たり虫数が0.1~0.2頭と、平年(25.6~52.2%、0.0~0.1頭)に比べて高かった。

普通期作では、平年並の6月3半旬より発生を認め、7月3半旬まで発生圃場率が23.5~70.8%、株当たり虫数が0.0~0.1頭と、平年(8.1~58.8%、0.0~0.1)に比べてやや高かった。その後、8月6半旬まで発生圃場率が87.5~91.7%、株当たり虫数が0.3~0.4頭と、平年(81.5~91.7%、0.3~0.7頭)並の発生であった。早期作・普通期作ともにや

や多発生となった要因として、前年の発生量がやや多く、越冬期間中(2~3月)の気温が平年より高かったことから、越冬幼虫の発生が助長され、本田での発生量に影響したと考えられた。

3. 果樹

(1) 果樹共通・カメムシ類

2月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査(11地点×2か所調査)では、6地点で越冬を確認し、越冬成虫は0.8頭/m²であり、平年(2.3頭/m²)に比べて低かった。

予察灯調査における初誘殺は、勝浦町では平年より14日遅い5月7日に、上板町では平年より24日早い4月2日に確認した。

また、勝浦町での4月1半旬~9月6半旬の誘殺数は、ツヤアオカメムシが615頭、チャバネアオカメムシが1,681頭と、平年(3,572頭、2,502頭)に比べて少なかった。

一方、上板町での誘殺数は、7月6半旬まで平年に比べてやや少なく推移していたが、8月1半旬~9月6半旬の誘殺数は、ツヤアオカメムシが1,452頭、チャバネアオカメムシが3,997頭と、平年(214頭、326頭)に比べて多かったため、令和3年9月3日付けで技術情報を発表した。また、9月6半旬~10月1半旬には1,574頭と、平年(154頭)の約10倍誘殺されたため、令和3年10月8日付けで注意報を発令した。多発生の要因として、梅雨入り後6月上旬から8月上旬にかけて、降水量が230.0mmと、平年(460.3mm)に比べて少なかったことが、越冬後の世代の発育に好適な条件となったと考えられた。

なお、県北部のカキ圃場における巡回調査では、10月3半旬に被害を認め、発生圃場率が66.7%、被害果率が5.0%と、平年(38.0%、1.2%)に比べて高かった。

(2) かんきつ・そうか病

3月4半旬の温州みかん圃場における旧葉での越冬病斑発生圃場率が37.5%、発病度が0.8と、平年(19.5%、0.1)に比べてやや高かった。

その後、春葉での発病は、平年並の5月3半旬に認め、温州みかん及びスダチにおける発生圃場率が20.0%、発病度が5.0と、平年(13.5%、2.7)に比べてやや高かった。また、果実での発病は、平年並の6月3半旬より認め、8月3半旬の発生圃場率が12.5%と、平年(30.2%)に比べてやや低かったが、発病度は0.3と、平年(0.9)並であった。

(3) かんきつ・黒点病

5月3半旬の温州みかん圃場での調査で、枯れ枝から黒点病菌を確認した圃場は37.5%で、 α 型胞子数は $0.8\sim 1.6\times 10^5$ 個/mlであった(前年:37.5%, $0.3\sim 0.9\times 10^5$ 個/ml)。また、11月3半旬の果実での調査では、発生圃場率が87.5%、発病度が4.3と、平年(74.6%, 6.7)並であった。

(4) かんきつ(スダチのみ)・かいよう病

5月3半旬の旧葉での発生圃場率が85.7%、発病度が2.5と、平年(78.6%, 1.8)並の発生であった。

その後、春葉では平年並の6月3半旬に発生を認め、発生圃場率が87.5%、発病度が2.4と、平年(77.1%, 1.6)に比べてやや高かった。しかし、果実では8月3半旬の発生圃場率が87.5%と、平年(86.3%)並であったが、発病度は0.6と、平年(3.4)に比べて低かった。果実での発病度が低かった要因として、6月下旬から8月上旬まで降水量が161.5mmと少なかったことが影響したと考えられた。

(5) かんきつ・ミカンハダニ

旧葉における発生は、5月3半旬では発生圃場率が66.7%、寄生葉率が10.7%と、平年(46.9%, 8.4%)に比べてやや高かった。

その後、春葉での発生は、6月3半旬には発生圃場率が25.0%、寄生葉率が1.6%と、平年(52.8%, 6.9%)に比べて低かったが、6月上旬から8月上旬にかけて、降水量が平年に比べて少なかったことが影響し、7月3半旬から8月3半旬までの発生圃場率が62.5~81.3%、寄生葉率が3.8~9.6%と、平年(55.0~58.9%, 6.6~7.9%)並であった。

(6) なし・黒星病

葉での発生は認められなかったが、果実では、平年よりやや遅い5月3半旬に発生を認め、発生圃場率が12.5%と、平年(5.0%)に比べて高かったが、発病率は0.1%と、平年(0.0%)並であった。その後、発生は認められなかった。

(7) なし・赤星病

平年よりやや遅い5月3半旬より発生を認め、6月3半旬まで発生圃場率が87.5~100%、発病葉率が5.9~13.4%と、平年(67.5~85.0%, 8.1~11.1%)並であった。

(8) なし・うどんこ病

平年より遅い8月3半旬より発生を認め、10月3半旬まで発生圃場率が12.5~100%、発病度が0.1~21.2と、平年(48.0~98.8%, 0.9~22.1)並

であった。

(9) なし・ナシヒメシクイ

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

また、フェロモントラップへの誘殺は、概ね平年並で推移した。

(10) なし・ハダニ類

平年より遅い7月3半旬に発生を認め、10月3半旬まで発生圃場率が12.5~75.0%、寄生葉率が0.3~33.4%と、平年(17.5~68.0%, 0.4~11.5%)並の発生であった。

(11) なし・アブラムシ類

平年並の5月3半旬より発生を認め、5月上旬及び6月の降水量が平年に比べて少なかったことが影響し、6月6半旬まで発生圃場率が50.0%、寄生新梢率が(1.5~5.8%)と、平年(25.0~50.0%, 2.1~7.2%)に比べてやや高かった。

(12) かき・炭そ病

3月の越冬病斑及び5月以降の新梢における発生は認められなかった。しかし、果実での発病は9月6半旬より認め、10月3半旬まで発生圃場率が16.7~33.3%、発病率が0.5~1.0%と、平年(17.3~25.3%, 0.4%)並であった。

(13) キウイフルーツ・かいよう病

発生を認めていない。

4. 野菜

(1) サツマイモ・アブラムシ類

平年並の5月6半旬より発生を認め、7月3半旬まで発生圃場率が12.5~43.8%、寄生株率が0.5~6.0%と、平年(35.6~66.1%, 5.9~22.8%)に比べてやや低かった。

(2) サツマイモ・ハスモンヨトウ

平年よりやや遅い7月3半旬に発生を認め、発生圃場率が12.5%、生息虫数が0.1頭と、平年(5.0%, 0.1頭)に比べてやや高かったが、その後、発生は認められなかった。

また、フェロモントラップへの誘殺数も5月3半旬~6半旬までは、平年よりやや多かったが、6月1半旬以降の誘殺数は、平年並~やや少なくて推移した。

(3) サツマイモ・シロイチモジヨトウ

平年よりやや遅い7月3半旬より発生を認め、8月3半旬まで発生圃場率が6.3~18.8%、生息虫数が0.1~0.4頭と、平年(5.3~11.8%, 0.2~0.3頭)並であった。

また、フェロモントラップへの誘殺数は、6月6

半年まで平年並～やや多く推移していたが、7月1
半年～2半年に、調査4地点平均で587頭と、平年
(133頭)の約4.4倍となったことより、令和3年
7月16日付けで注意報を発令した。その後、7月3
半年以降は、平年並～やや多く推移していたが、9
月1半年以降は平年より少なく推移した。

(4) サツマイモ・ナカジロシタバ

平年並の6月6半年より発生を認め、8月3半年
まで発生圃場率が11.1～25.0%、生息虫数が0.1
～0.6頭と、平年(4.4～21.6%、0.1～0.9頭)並
であった。

(5) サツマイモ・ハダニ類

平年並の5月6半年より発生を認め、7月6半年
まで発生圃場率が0～46.2%、寄生株率が0～3.3%
と、平年(11.7～70.0%、3.3～16.3%)に比べて
やや低かったが、8月3半年には発生圃場率が
22.2%、寄生株率が1.2%と、平年(21.0%、1.6%)
並であった。

(6) 冬春トマト・疫病(令和2年度産)

平年より遅い3月3半年に発生を認め、発生圃
場率が12.5%、発病度が0.1と、平年(17.1%
、1.2)に比べてやや低く、その後、4月6半年まで
発生は認められなかった。

(7) 冬春トマト・灰色かび病(令和2年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(8) 冬春トマト・葉かび病(令和2年度産)

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(9) 冬春トマト・タバココナジラミ(令和2年度 産)

平年並の10月6半年より発生を認め、11月6
半年には発生圃場率が100%、寄生葉率も4.3%と、
平年(44.0%、3.6%)に比べて高かった。その後、
厳寒期には平年並で推移したが、令和2～3月にか
けて気温が高かったことも影響し、3月4半年より
再び増加し、4月6半年には発生圃場率が62.5%
、寄生葉率が4.1%と、平年(42.9%、3.4%)に比べ
てやや高かった。

(10) 夏秋ナス・うどんこ病

平年並の6月6半年より発生を認め、8月6半年
まで発生圃場率が11.1～77.8%、発病葉率が0.4
～9.0%と、平年(10.6～52.6%、0.6～7.4%)に
比べてやや高かった。多発生の要因として、6月上
旬から8月上旬まで降水量が少なかったことが影
響したと考えられた。

(11) 夏秋ナス・ハスモンヨトウ

平年よりやや遅い7月3半年に発生を認め、8月

6半年まで発生圃場率が0～22.2%、被害度が0～
0.3と、平年(0～11.4%、0～0.2)並であった。

(12) 夏秋ナス・ミナミキイロアザミウマ

平年よりやや遅い7月3半年より発生を認め、8
月6半年まで発生圃場率が33.3～55.6%、寄生葉
率が0.7～3.0%と、平年(56.3～62.5%、1.9～
3.6%)並であった。なお、被害果実は調査期間を
通して認められなかった。

(13) 夏秋ナス・アブラムシ類

平年並の6月6半年より発生を認め、8月6半年
まで発生圃場率が0～77.8%、1葉当たりの寄生虫
数が0～0.8頭と、平年(4.4～17.7%、0.0～0.2頭)
に比べて高かった。多発生の要因として、6月上旬
から8月上旬まで降水量が少なかったことが影響
したと考えられた。

(14) 夏秋ナス・オオタバコガ

平年より遅い7月6半年より卵の産下を認め、8
月6半年まで発生圃場率が22.2～66.7%、産下卵
率が0.2～1.4%と、平年(24.4～35.4、0.4～0.5%)
に比べてやや高かった。また、被害果は、平年より
やや遅い7月3半年より認め、8月6半年まで発生
圃場率が11.1～22.2%、被害果率が0.2～0.3%と、
平年(2.2～4.7%、0.0%)に比べて高かった。多
発生の要因として7月中旬から8月中旬まで降水
量が少なかったことが影響したと考えられた。

また、フェロモントラップ定点調査では、4月6
半年より誘殺数が増加し、4月6半年～5月5半年
まで56頭と、平年(26頭)に比べて多かった。し
かし、その後の発生活消長は平年同様で、誘殺数は9
月6半年まで平年に比べてやや少なく推移した。

(15) 冬春ナス・うどんこ病(令和2年度産)

平年並の10月6半年に発生を認め、4月6半年
まで発生圃場率が0～28.6%、発病葉率が0～
0.4%と、平年(8.3～41.9%、0.5～3.3%)に比べ
てやや低かった。

(16) 冬春ナス・灰色かび病(令和2年度産)

葉での発生は、巡回調査圃場では認められな
かった。また、果実では、平年より遅い4月6半年
に発生を認め、発生圃場率が28.6%、発病果率が
0.3%と、平年(10.5%、0.2%)に比べてやや高
かった。

(17) 冬春ナス・すすかび病(令和2年度産)

平年より遅い2月6半年に発生を認め、4月6半
年まで発生圃場率が14.3～28.6%、発病葉率が0.6
～4.7%と、平年(61.7～76.0、7.3～10.4%)に
比べて低かった。

(18) 冬春ナス・ミナミキイロアザミウマ (令和2年度産)

平年並の10月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が0～57.1%、寄生葉率が0～10.0%と、平年(43.8～71.2%, 5.6～14.6%)に比べてやや低かった。なお、被害果は巡回調査圃場で発生は認められなかった。

(19) 冬春ナス・タバココナジラミ (令和2年度産)

平年並の10月6半旬より発生を認め、冬季の12月4半旬から2月6半旬においても、発生圃場率が71.4～100%、寄生葉率が5.7～16.1%と、平年(25.7～36.5%, 1.9～2.5%)に比べて高く推移し、4月6半旬には、発生圃場率が57.1%、寄生葉率が21.6%と、平年(31.0%, 3.7%)に比べて高かった。多発生の要因として、令和元年10月は曇雨天が続き薬剤による適期防除が行えず、また、令和2年2月上旬から3月下旬まで平均気温が平年に比べて1.4～2.2℃高かったことが影響したと考えられた。

(20) 冬春ナス・ハダニ類 (令和2年度産)

10月6半旬から3月4半旬まで、発生は認められなかったが、3月下旬～4月上旬の平均気温が平年に比べて高かったことも影響し、4月6半旬に発生を認めた。なお、発生圃場率は14.3%、寄生葉率が0.1%と、平年(6.5%, 0.3%)並であった。

(21) 冬春キュウリ・べと病 (令和2年度産)

平年よりやや遅い1月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～100%、発病葉率が1.2～18.5%と、平年(43.3～80.4%, 6.9～21.5%)並であった。

(22) 冬春キュウリ・うどんこ病 (令和2年度産)

平年並の12月4半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が22.2～75.0%、発病葉率が0.9～6.9%と、平年(54.4～75.4%, 5.0～18.9%)に比べてやや低かった。

(23) 冬春キュウリ・褐斑病 (令和2年度産)

平年並の12月4半旬に発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が11.1～37.5%、発病葉率が0.1～2.4%と、平年(13.6～68.6%, 0.3～16.9%)に比べてやや低かった。なお、近年、主要産地では、褐斑病耐病性品種の導入が進んでおり、発生量の低減に繋がっている。

(24) 冬春キュウリ・ミナミキイロアザミウマ (令和2年度産)

平年よりやや遅い1月6半旬より発生を認め、4

月6半旬まで発生圃場率が11.1～55.6%、寄生葉率が0.9～4.8%と、平年(18.3～52.8, 1.1～11.9%)並の発生であった。なお、被害果は巡回調査圃場で発生は認められなかった。

(25) 冬春キュウリ・タバココナジラミ (令和2年度産)

平年並の11月6半旬より発生を認め、4月6半旬まで発生圃場率が22.2～44.4%、寄生葉率が1.0～4.1%と、平年(5.6～20.8%, 0.1～1.0%)に比べて高かった。多発生の要因として、令和元年11月及び令和2年2月から3月下旬まで平均気温が平年に比べて高かったことが影響したと考えられた。

(26) 夏ネギ・さび病

巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(27) 夏ネギ・べと病

平年並の5月6半旬に発生を認め、発生圃場率が28.6%、被害株率が1.7%と、平年(2.8%, 0.1%)に比べて高かった。多発生の要因として、梅雨入りが5月12日と、平年(6月5日)に比べて21日早く、5月中旬の日照時間が平年に比べて少なかったことが影響したと考えられた。

(28) 夏ネギ・ネギアザミウマ

平年並の4月6半旬に発生を認め、発生圃場率が77.8%、被害度が3.1と、平年(76.0%, 5.2)並の発生であったが、5月中旬にまとまった降雨があったことも影響し、5月6半旬には発生圃場率が85.7%、被害度が4.9と、平年(90.0%, 11.1)に比べてやや低かった。

(29) 秋冬ネギ・黒斑病

平年並の7月6半旬に発生を認め、発生圃場率が11.1%、発病度が0.1と、平年(11.3%, 0.1)並であったが、8月以降発生は認められなかった。

(30) 秋冬ネギ・ネギアザミウマ

平年並の7月6半旬より発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が22.2～66.7%、被害度が0.3～2.2と、平年(31.3～49.2%, 1.2～1.7)に比べてやや高かった。多発生の要因として、7月中旬から8月上旬まで降水量が68.0mmと、平年(201.9mm)に比べて少なかったことが影響したと考えられた。

(31) 秋冬ネギ・ネギハモグリバエ

平年並の7月6半旬より発生を認め、8月6半旬まで発生圃場率が22.2～55.6%、被害度が0.2～0.7と、平年(83.0～91.1%, 9.3～12.5)に比べて低く、その後、巡回調査圃場での発生は認められなかった。

(32) 秋冬ネギ・シロイチモジヨトウ

平年並の7月6半旬より発生を認め、9月6半旬まで発生圃場率が44.4～66.7%、寄生株率が1.6～6.7%と、平年(23.1～52.2%、1.6～4.6%)に比べてやや高かった。また、7～9月のフェロモントラップ定点調査での誘殺数は、2,591頭と、平年(1,876頭)に比べてやや多かった。

(33) 冬春ホウレンソウ・ペと病(令和2年度産)

10月6半旬から2月6半旬まで発生は認められなかったが、3月4半旬に発生を認め、発生圃場率が22.2%、発病度が0.2と、平年(17.1%、1.7)並であった。

(34) 冬春ホウレンソウ・アブラムシ類(令和2年度産)

平年並の10月6半旬より発生を認め、1月6半旬まで発生圃場率が8.3～20.0%、株当たり寄生虫数が0.0頭と、平年(15.4～36.5%、0.1～0.2頭)並の発生であった。しかし、その後2月から3月にかけて平均気温が平年に比べて高かったことが影響し、3月4半旬には発生圃場率が88.9%と、平年(46.7%)に比べて高かった。なお、1株当たり寄生虫数は0.0頭と、平年(0.3頭)に比べてやや低かった。

(35) 冬春イチゴ・うどんこ病(令和2年度産)

葉での発生は、9月6半旬から2月6半旬まで認められなかったが、4月4半旬に発生を認め、発生圃場率が7.1%、発病葉率が0.1%と、平年(3.6%、0.1%)に比べてやや高かった。

果実での発生は、平年よりやや遅い2月6半旬に発生を認め、発生圃場率が7.1%、発病果率が0.1%と、平年(2.1%、0.1%)に比べて高かったが、その後、発生は認められなかった。

(36) 冬春イチゴ・炭疽病(令和2年度産)

簡易エタノール噴霧法で炭疽病菌の潜在感染検定を実施した結果、7月3半旬の子苗で潜在感染圃場率が86.4%、感染株率が0～95.0%であった。

育苗圃では、8月6半旬に発生を認め、発生圃場率が14.3%、発病株率が0.6%であった。

本圃では、平年並の9月6半旬より発生を認め、12月4半旬まで発生圃場率が7.1～28.6%、発病株率が0.0～0.3%と、平年(1.8～7.3%、0.0～0.1%)に比べて高かった。多発生の要因として、令和元年9月上旬に181mmのまとまった降雨があり、育苗期の発生量を増加させたことが、本圃での発生量に影響したと考えられた。

(37) 冬春イチゴ・アブラムシ類(令和2年度産)

平年並の9月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が14.4～28.1%、寄生株率が0.9～9.4%と、平年(9.5～28.6%、0.6～5.1%)並であった。

(38) 冬春イチゴ・ハダニ類(令和2年度産)

育苗圃では、8月6半旬に発生を認め、発生圃場率が14.3%、寄生葉率が0.8%であった。

本圃では、平年よりやや遅い10月6半旬に発生を認め、3月4半旬まで発生圃場率が7.1～42.9%、寄生葉率が0.1～6.1%と、平年(31.5～70.7%、2.6～14.8%)に比べて低かった。

(39) 冬春イチゴ・アザミウマ類(令和2年度産)

平年よりやや遅い1月6半旬より発生を認め、3月4半旬まで、発生圃場率が21.4～64.3%、寄生花率が0.9～5.6%と、平年(5.4～37.5%、0.1～2.2%)に比べて高かった。多発生の要因として、令和2年2月上旬から3月下旬まで平均気温が平年に比べて1.4～2.2℃高かったことが影響したと考えられた。

令和3年度 主要病害虫発生状況(徳島県)

単位：ha

作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要	作物名 (作付面積) 病害虫名	発生面積	摘 要
早期期水稲 (4,260)			かき (180)		
葉いもち	3,510	多	炭そ病	60	並
穂いもち	1,895	多	うどんこ病	30	少
紋枯病	250	少	角斑落葉病	150	やや多
黄化萎縮病	0	並	円星落葉病	0	やや少
ニカメイガ	0	並	カメムシ類	150	やや多
セジロウンカ	3,260	やや多	冬春トマト※2 (36)		
トビイロウンカ	0	並	疫病	5	少
ツマグロヨコバイ	1,890	並	灰色かび病	0	やや少
イネクロカメムシ	0	やや少	葉かび病	0	並
斑点米カメムシ類	1,755	少	ハダニ類	50	並
コブノメイガ	1,250	並	タバココナジラミ	30	やや多
イネミズゾウムシ	2,005	やや多	夏秋ナス (75)		
イチモンジセセリ	250	やや少	うどんこ病	60	やや多
普通期水稲 (6,710)			ミナミキイロアザミウマ	40	並
葉いもち	3,635	並	オオタバコガ	50	やや多
穂いもち	5,370	多	ハスモンヨトウ	35	やや多
紋枯病	3,360	やや多	ハダニ類	50	並
ごま葉枯病	0	やや少	ニジュウヤホシテントウ類	50	多
縞葉枯病	0	やや少	冬春ナス※2 (16)		
稲こうじ病	1,790	多	灰色かび病	5	並
セジロウンカ	3,635	少	うどんこ病	5	やや少
トビイロウンカ	280	やや少	すすかび病	5	少
ツマグロヨコバイ	4,470	並	ハダニ類	5	並
イネクロカメムシ	0	少	ミナミキイロアザミウマ	10	やや少
斑点米カメムシ類	5,590	並	冬春キュウリ※2 (30)		
コブノメイガ	560	やや少	べと病	30	並
イネミズゾウムシ	610	並	うどんこ病	20	やや少
イチモンジセセリ	0	少	灰色かび病	0	やや少
さつまいも (1,090)			褐斑病	10	やや少
ナカジロシタバ	270	並	アブラムシ類	5	並
イモキバガ	135	やや少	ミナミキイロアザミウマ	20	並
ハダニ類	505	やや少	夏ネギ (54)		
タバココナジラミ	360	やや少	べと病	15	多
かんきつ※1 (1,130)			さび病	0	少
そうか病	140	やや多	ネギアザミウマ	50	やや少
黒点病	740	並	秋冬ネギ (113)		
かいよう病	380	並	べと病	0	並
アブラムシ類	465	やや少	さび病	0	並
ミカンハダニ	650	並	ネギアザミウマ	75	やや多
ミカンハモグリガ	495	少	冬春ホウレンソウ※2 (408)		
なし (203)			べと病	120	並
黒星病	25	並	アブラムシ類	360	やや多
赤星病	200	並	シロオビメイガ	75	やや多
うどんこ病	200	並	冬春イチゴ※2 (73)		
カメムシ類	0	やや少	炭そ病	15	多
ナシヒメシンクイ	0	並	うどんこ病	5	やや多
ハダニ類	150	並	灰色かび病	5	並
アブラムシ類	50	やや多	アブラムシ類	25	並
			ハダニ類	30	少
			アザミウマ類	50	多
			ハス (527)		
			褐斑病	75	やや少
			ハスモンヨトウ	450	やや少

※1 温州みかん，スダチに限る。※2 令和2年度産